

理論編

目 次

I 研究主題設定の理由	
1 はじめに.....	1
2 前回の研究から	1
3 本グループの子供たちにとっての将来の生活について	1
II 基本的考え方	
1 「ことば」を培うために	2
2 「ことば」を培う環境を整えるために	2
3 わたしたちが考えるサインとは	2
III 研究内容	
1 アセスメントの作成	3
2 サインを使うための環境を整える	6
IV 実 践	
1 実践研究の進め方	8
V 研究のまとめ.....	9
VI 今後の課題.....	10
引用・参考文献.....	10

I 研究主題設定の理由

1 はじめに

本グループが対象にしているのは、

伝え合い分かり合うために話し言葉（以下言葉）を用いることが難しく、気持ちの中には、何かを伝えたいという欲求は持っているものの、それをどのように表現すればよいのか分からなかったり、表現する手段を持たなかったり、相手にうまく伝わらなかったりする

子供たちである。

2 前回の研究から（資料1参照）

わたしたちは、言葉の習得につながる様々な要因を「ことば」ととらえ、言葉の習得には、「ことば」を培うことが大切であると考え取り組んできた。その際、動作を伴った伝達手段であるサインを言葉の習得の前段階と位置付け、サイン指導の在り方に視点を当て、「ことば」を培うためには何が必要かを探ってきた。

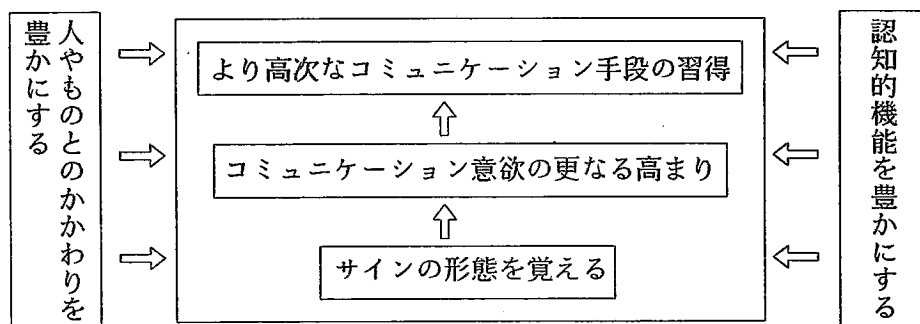


図1 サイン習得の関係図

その中で、サインを習得するためには、「人やものとのかわりを豊かにする」「認知的機能を豊かにする」の二つを高めていくことと「サインの形態を覚える」ことでサインの習得が可能になり、それが言葉の発達につながると考え具体的手立てを探ってきた。

- ・ 実践を通して、人やものとのかわり、認知的機能、サインの形態を覚えることは、サインの習得と関連があることが分かった。
- ・ 長期的展望に立ち、子供の伝達手段を高次化していくための、学校、家庭、地域などとの連携の在り方を検討する必要がある。

成果
と
課題

3 本グループの子供たちにとっての将来の生活について（資料2参照）

将来の生活において、子供たちが、遊びや要求、友達とのかわりなどにおいて、サインなどを使ってお互いの気持ちを表したり、お互いの気持ちを理解したりといった、周りの人との主体的なかわりができるようになることが大切である。



前回の研究を踏まえ、子供たち一人一人の力を高める指導を継続するとともに、将来につながる取り組みにしていくために、サイン指導の方法を通して「ことば」を培うということを探っていくことにした。



《研究主題》「ことば」を培うためのサイン指導の在り方を探る

II 基本的考え方

1 「ことば」を培うために (資料3参照)

子供たちが将来の生活においてサインなどを使って一人でも多くの人と、一つでも多くのことを伝え合い、分かり合うことができるようになるために、子供自身の持つ力を高めるとともに、子供の周りにいる人々が子供を理解し、一人一人の子供に応じたかかわり方をしていくなど「ことば」を培う環境を整えていく手立てをサイン指導を通して探っていくことにする。

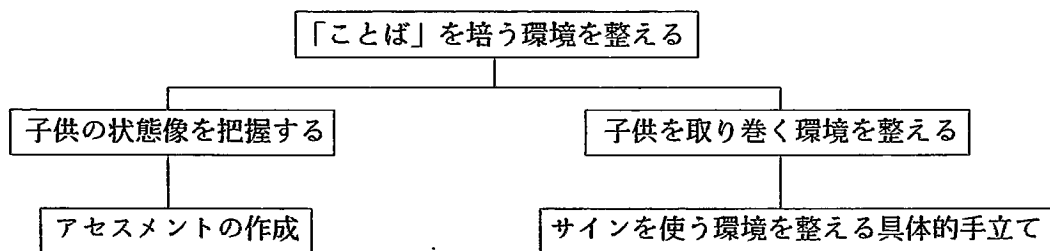
2 「ことば」を培う環境を整えるために (資料3参照)

(1) 子供の実態をよりの確に把握するためのアセスメントを作成する。

子供の将来を考えた指導のためには、まず、子供の現在の実態をしっかりと把握しておくことが重要になる。また、そのためには学校だけでなく、家庭でのアセスメントも実施し、学校と家庭の両方の子供の実態を把握しておくことが、子供の現在の課題、将来に向けての課題につながると考える。

(2) 子供の将来を考え、学校、家庭などサインを使う環境を整えていく具体的手立てを考える。

子供がサインを習得するためには、子供の周りにいるわたしたちが、まず、サインを覚え、サインを使い、子供に投げ掛けていくことが大切である。それとともに、サインを使って伝え合ったり、分かり合ったりする場を学校だけでなく家庭などへ広げて取り組むことが、子供たちの将来の生活のためには必要であると考えます。



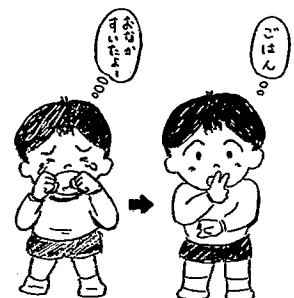
このような将来の生活を考えた指導を通して「ことば」を培っていくことが、子供たちの学校生活の中での「伝え合い、分かり合う関係」を広げ、更に家庭や地域でも主体的に「伝え合い、分かり合う関係」を築いていくことにつながると考える。

3 わたしたちが考えるサインとは

サインの基本的考え方について (資料4, 5参照)

サインの定義 = 「手や腕などの身体各部位、および視線や表情により、ある特定の事物、事象、行為、状態などを示す意図的な伝達手段」

- 子供の行動一つ一つに何らかの意図があるという視点に立ち、子供の出す自然な動作を大切にしていく。
- 子供が起こしている意図的な動作をサインとしてとらえる低次なサインの段階から、一つのサインで一つの意味を持ったり、初めて合った人にも理解できたりする高次なサインの段階までサインの範ちゅうを広くとらえる。



Ⅲ 研究内容

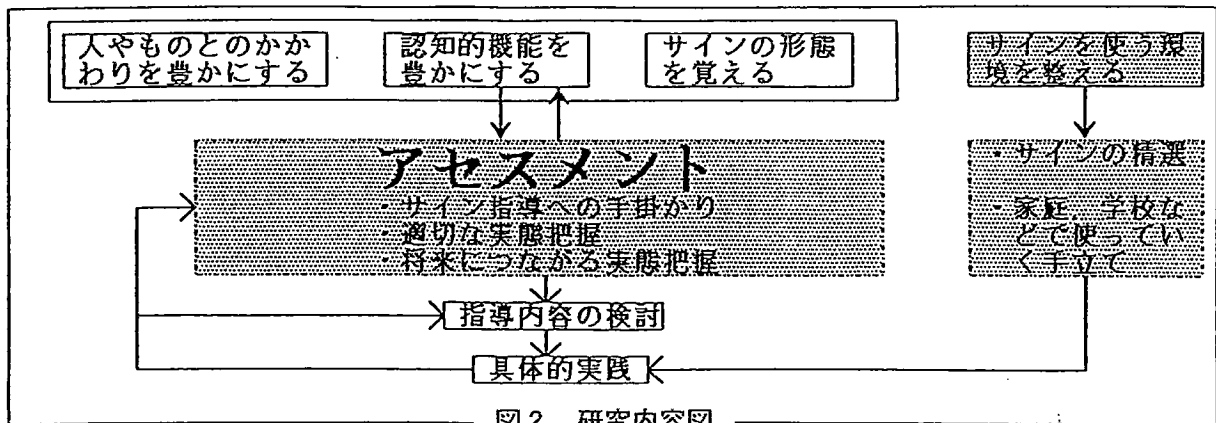


図2 研究内容図

1 アセスメントの作成

(1) アセスメントのねらい

○ サイン指導への手掛かり

初期アセスメントを基に、サイン指導を考えていく際に、必要な情報をより細かな視点で実態把握し、指導の手掛かりにしていくためのアセスメントを作成していく。

○ 子供の実態を基にした指導課題の明確化

前回の研究内容の観点でアセスメントを作成していくことで、これまでの観定の妥当性を検討するとともに、子供の実態を適切に把握し、指導課題を導いていけるものにする。

○ 子供の将来を考えた指導のための、子供の“いま”の把握

子供の将来を考えるためには、子供の“いま”の様子や家庭などの様子も大切にしたい。そこから将来の生活に向けた指導を考えていく必要がある。

(2) アセスメントの考え方 (資料6参照)

わたしたちは、アセスメントをより有効に活用していくためにも以下のように考えていくことにした。

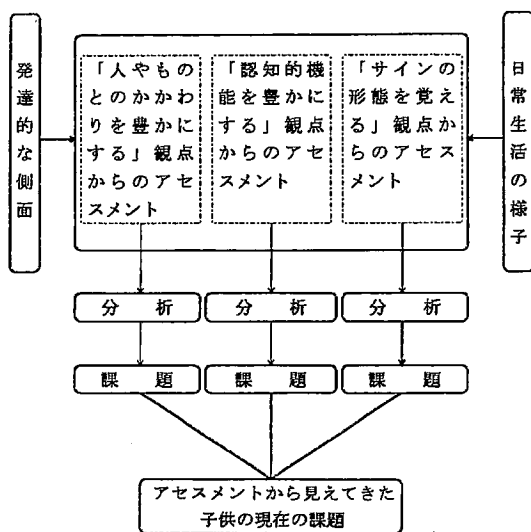


図3 アセスメントの考え方

- ・ アセスメントは、発達の側面や子供の日常生活の様子を基に、チェックリスト的なものではなく記入欄も設けることで、各項目に沿って子供の実態や課題を把握できるものを作成する。
- ・ アセスメントから見えてきた子供の具体的な状態像を基に分析を行い、アセスメントごとの課題を把握する。
- ・ さらに、それぞれのアセスメントを相互に関連させて見ていくことで、子供の現在の課題を総合的な視点で把握し、指導方針や指導内容につなげていく。

(3) 「人やものとのかかわりを豊かにする」観点からのアセスメント (資料7参照)

アセスメントの考え方

《作成に当たって》

- わたしたちは、このアセスメントを子供と保護者、わたしたちとの関係をみる手掛かり、関係を深めていくための手掛かりとして作成する。
- 子供たちが最も自分を表現し、自分の本来の姿を出しているのは家庭であると考え、学校生活だけでなく家庭生活での子供の姿を知ることができるアセスメントを作成する。

《活用に当たって》

- 学校、家庭それぞれに同じ観点のアセスメントを実施し、それぞれのアセスメントを比較しながら子供の興味・関心のある話題や要求、かかわり方など指導の手掛かりとする。
- 子供との関係が、「やりとりの関係」にあっても「提示の関係」や「並ぶ関係」、「うたう関係」を相互に関連付けながら、お互いの関係について十分に検討することが大切である。

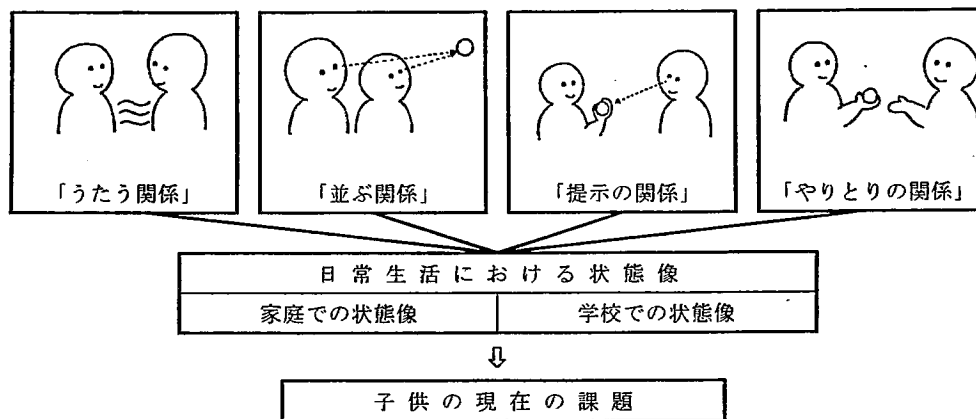


図4 活用についての考え方

- ・ もし、子供との関係が「うたう関係」にあるならば、共通した体験を持ちながら、同じ体験を共有することができる状況を設定することで情動関係を深めることが大切である。
- ・ 子供との関係が「並ぶ関係」にあるならば、子供の興味あるものを一緒に見て、子供が理解しやすい言葉や表現を大きくした動作などを用いて子供の気持ちに働き掛け、子供の行動をまねたり、子供の言葉に合わせてこたえることが大切である。
- ・ 子供との関係が「提示の関係」にあるならば、大いに褒めたり、喜んだりすることで、自分が持っているものを見せたいという子供の積極的なかかわりを、より深めていくことが大切である。
- ・ 子供との関係が「やりとりの関係」にあるならば、ボールの受け渡し遊びのように適当な距離を置くことで、目標をはっきりさせたり、投げ手と受け手が交互に替わることで役割交替ができるような状況を設定したりしながら、このようなもののやり取りを基にサインや言葉が入るような「ことば」をやり取りする関係に深めていくことが大切である。

(4) 「認知的機能を豊かにする」観点からのアセスメント (資料8参照)

アセスメントの考え方

《作成に当たって》

- 認知的機能を豊かにすることのそれぞれの力は、お互い関連し合っており、子供の行動の中にも混在して出てくることもあるが、それぞれの力を知ることは、子供の課題を設定し、かかわっていく際にとっても重要になると考える。
- アセスメントの作成に当たっては、子供の状態像から考えていくことにした。その際に、それぞれの力が分かりやすいようにステップの内容を説明するとともに、各ステップの考え方の基本となる具体例を挙げた。また、それを踏まえて子供の日常生活で見られる姿を記入例として挙げることにする。

《活用に当たって》

- アセスメントの活用に当たっては、記入例で子供をみて、判断するのではなく、この記入例を目の前の子供の日常生活で見られる場面に置き換えて考えていくことが子供の状態像や課題を知るために大切なことと考え、記述式にすることにした。

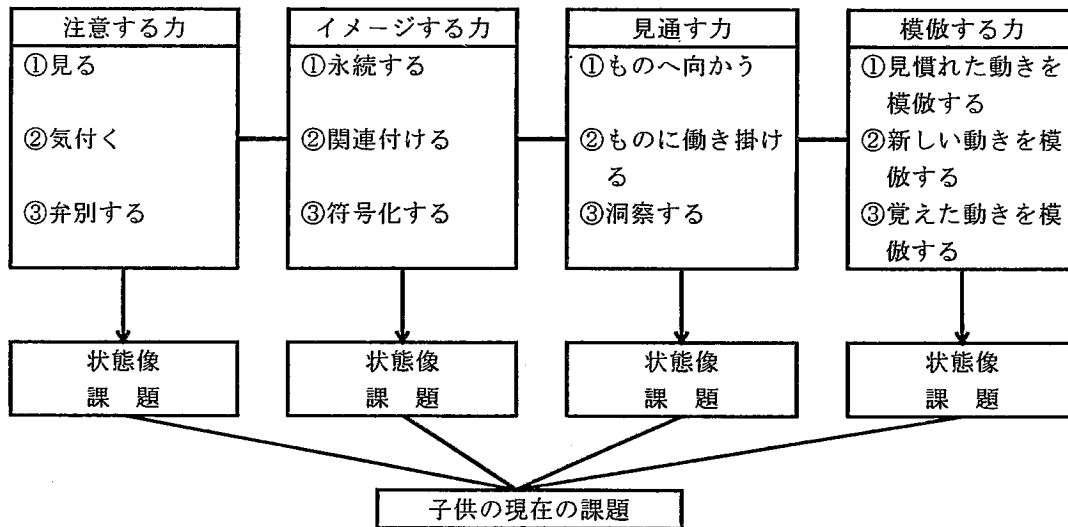


図5 活用についての考え方

- ・ ここで記入する状態像は、子供が持っている力を把握するためのものであるため、記入の際には、子供が力を一番発揮できる場面を見つめることが大切である。例えば、文字を「見る」ことができなくても、好きなおもちゃを「見る」ことができればよいと考える。
- ・ 各力のステップについては、アセスメントにある状態像をみた場合、そのステップに至っているからといって、そこまでの指導が必要ないというわけではない。例えば、「イメージする力」でいえば、「符号化する」段階にあっても、まだそれがわずかなものに限られていたならば、「関連付ける」ことも十分に高めていく必要があると考える。
- ・ この四つの力は独立したものではなく、いずれもシンボル機能の形成や、高次化につながるという意味でも相互に関連し合っている。例えば、「模倣する力」を高めるためには、まず子供が相手の動作を「見る」ことができるかが大切になってくると考えられる。また、同様に「見る」ことを高めることで、「模倣する」ことができるようになることも考えられる。したがって、わたしたちは各力から挙がってきた状態像や課題から、子供にとって今何が必要なのかを、総合的に見て指導していくことが望ましいと考える。

(5) 「サインの形態を覚える」観点からのアセスメント

(資料9参照)

アセスメントの考え方

《作成に当たって》

- サインを使うに当たっては、身体機能（特に腕や手指の動き）が多分に関係してくる。そこで、サイン指導の際、子供の身体機能面を把握することで、より子供に合った指導を進めていくことができると考えた。さらに、子供の日常生活場面などをとらえて、子供自身が、身体の特定の部位を動かせるかどうかを見ていくことが大切であると考え、腕や手指を中心とする身体機能面に視点を当て作成する。
- 子供がサインを使うときに必要と思われる具体的な動きと、それに関連する日常生活の中で見られる動きを挙げ、子供の実態を把握していく。また、その動きに結び付くようなサインについても、参考例として挙げる。さらに、一人一人の実態をよりの確にとらえることができるように備考欄を設け、子供の動きを記述する。

《活用に当たって》

- アセスメントの活用に当たっては、子供一人一人に応じたサイン指導を行うために身体機能面に視点を当てながら、人やものとのかわりや認知的機能とも相互に関連させて幅広い視野で子供を見ていくことが大切であるとする。

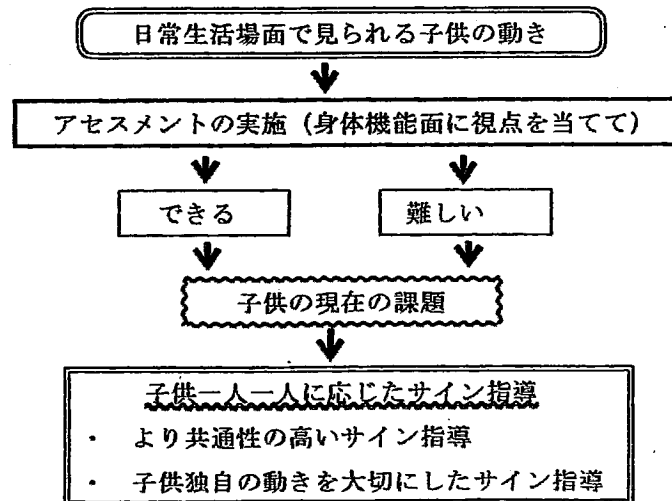


図6 活用についての考え方

- 本アセスメントを活用しながら、子供がどの程度サインを覚え、使っているか、どのような独自のサインを使っているかを知ることによって、より子供の実態を把握することができる考え、サイン調べ（資料10参照）を行い、サイン指導に生かしていく。

2 サインを使うための環境を整える

(1) サイン指導を行う上での基本的な姿勢について

- 子供の実態に応じたサインを使うようにする。
- 子供の視線に注意し、子供が教師側をしっかりと見ているかを確認しながら、サインとサインの間に無駄な動作を入れずに、はっきりとしたサインを使うようにする。
- サインと一緒に言葉も添え、口形や音声も意識させながら使うようにする。

(2) サインの形態について

先に述べたように、子供の意図のある動作をサインとして考えていくことを大切にしながら、子供独自のサインや本校でこれまで使われてきた本校共通のサインなどを共通理解して取り組んできた。

その中で、高次な共通のサインとして日本マカトン協会による「改訂日本版マカトンサイン」を参考にした。その理由は、次のとおりである。

- ① 知的障害の子供たちにも習得しやすいように、簡単な動作から形成されていること。
- ② 現在、全国的に普及されつつあること。

(3) 家庭、学校などでサインを使っていくための具体的な取り組み（資料11参照）

わたしたちは、サインを使う環境を整えるため、次のような取り組みを行ってきた。

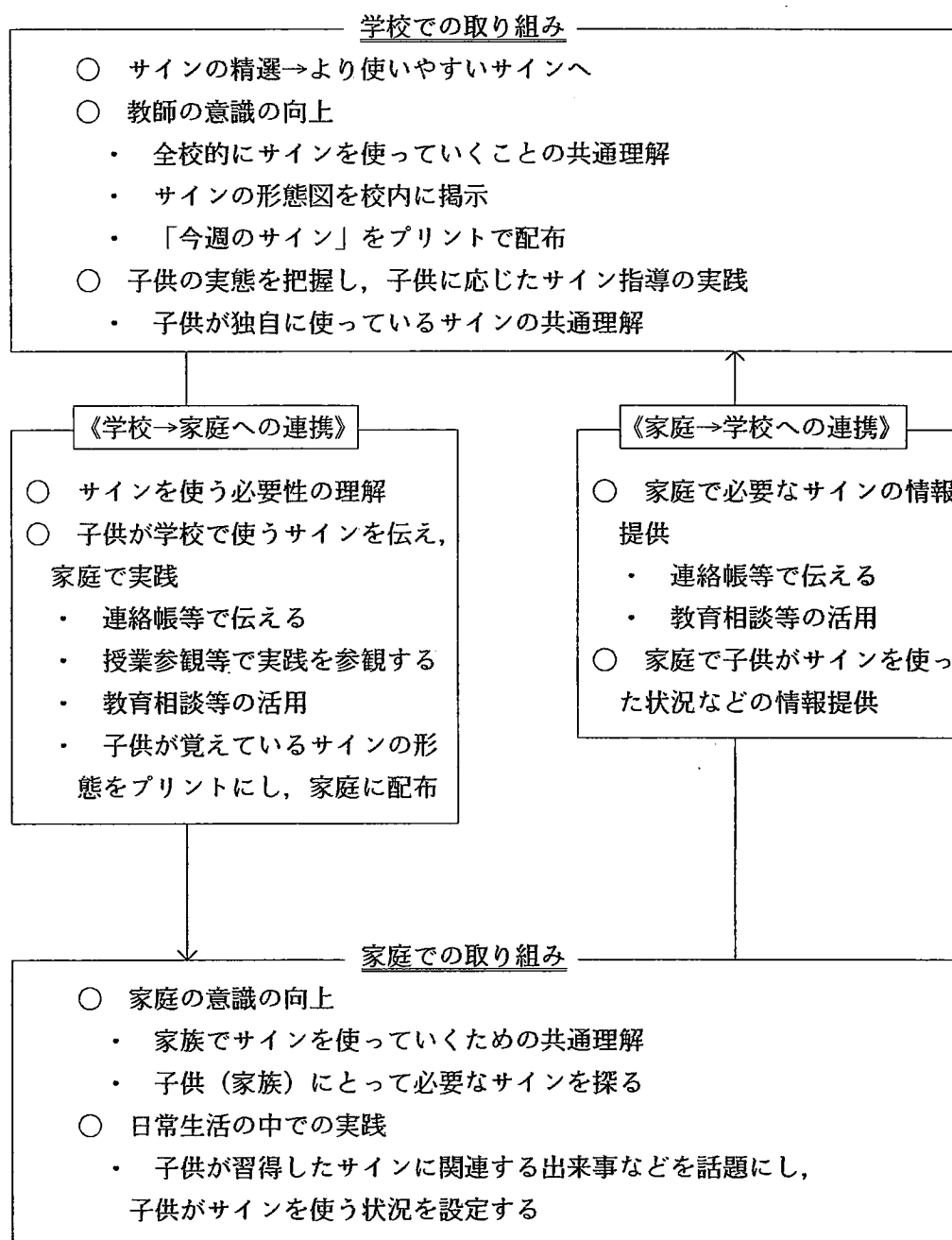
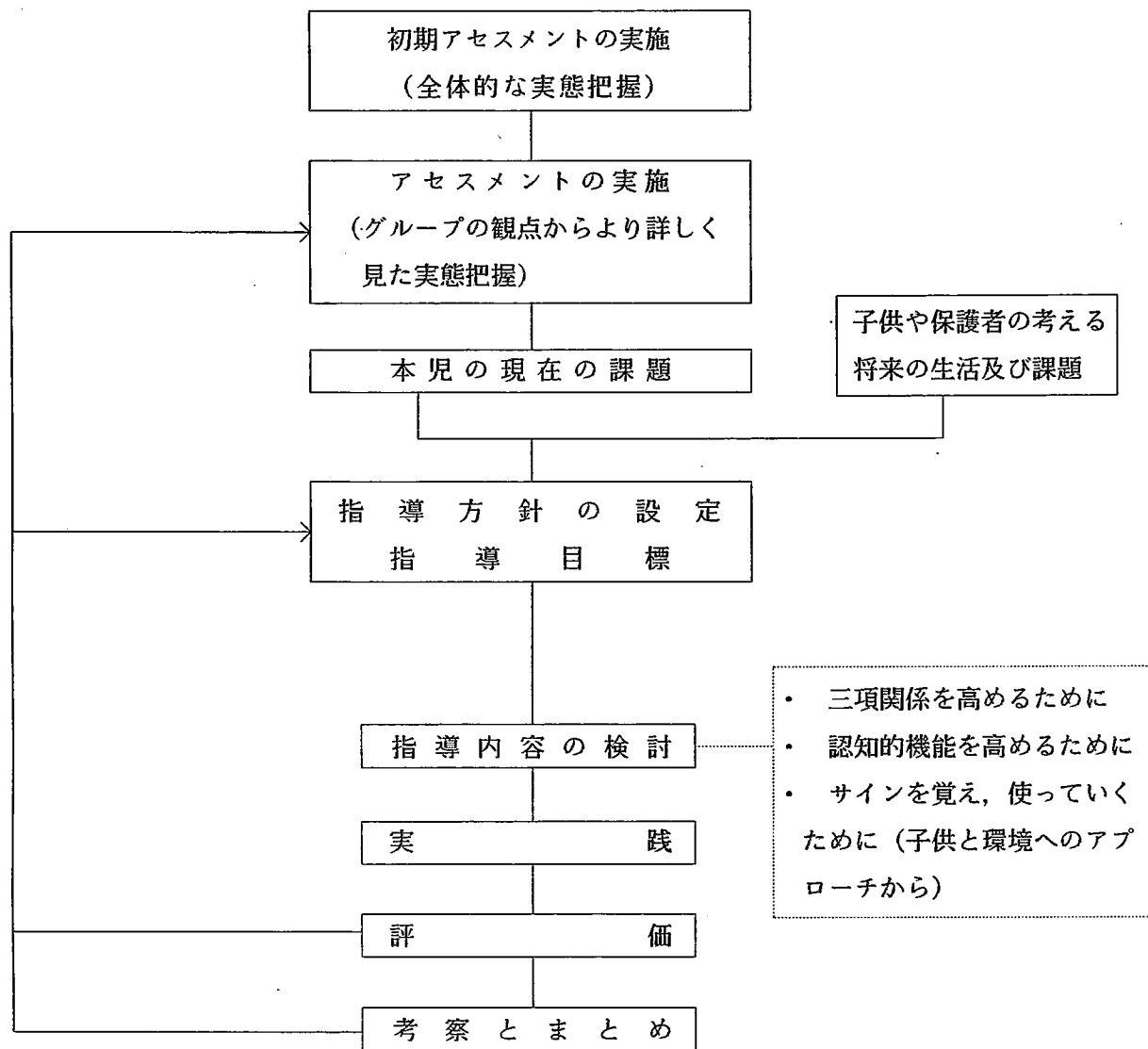


図7 学校、家庭でのサイン指導の取り組み

IV 実 践

1 実践研究の進め方

わたしたちは、一人一人の子供の持つ力を高めるコミュニケーション指導の進め方を探るために、将来の生活につながるという視点で、「ことば」を培うサイン指導の在り方について、以下のような手順で事例研究を進めることにした。



実践事例 《実践事例については、実践編 (11ページ～) 参照》

事例Ⅰ「自分の意思を伝えるために、主体的にサインを使っていくことを目指したT. Y児の指導」(中学部3年 男子)

事例Ⅱ「伝える手段を身に付け、豊かにやり取りすることを目指したK. M児の指導」(小学部2年 女子)

事例Ⅲ「サインを使って、かかわりの対象や話題を広げていくことを目指したN. Y児の指導」(高等部3年 男子)

V 研究のまとめ（資料12参照）

子供の“いま”の実態をよりの確に把握するためのアセスメントの作成と活用

- ・ 人やものとのかかわりや認知的機能，サインの実態把握において，これまで主観的に子供の状態像をみていくことが多かったが，アセスメントを作成してきたことで客観的に子供の状態像を把握する視点ができる。
- ・ 家庭での様子を把握することもアセスメントに含めたことで，これまでより家庭での子供の状態像を詳しく知ることができ，家庭での様子と学校での様子を参考にしながら指導に生かしていくことができた。
- ・ アセスメントを実施することで，教師や保護者が同じ視点で子供を見つめたり，子供のことを考えたりすることができた。

子供の将来を考え，学校，家庭などサインを使う環境を整えていく具体的手立てを考える

○ 学校での取り組みから

- ・ 積極的にサインを使うように，サインのプリントを掲示するなどして環境を整えてきたことで，全校的にサインに取り組み，教師や子供の意識の向上につながった。
- ・ 教師からの働き掛けが高まるとともに，日常生活の中で，子供が，教師のサインの模倣をしたり，サインを使って要求を伝えたりするなどの変容が見られた。
- ・ 教師と子供の間だけでなく，子供同士でも，サインを介してのかかわりが見られるようになった。
- ・ 独自のサインを使っている子供のサインを，全校的に共通理解してきたことで，子供に応じたかかわり，働き掛けが見られるようになった。

○ 家庭での取り組みから

- ・ サインの理解を図り，家庭でもサインを使うように働き掛けてきたことで，家庭での子供の理解が深まり，家族間で子供のサインについて関心が高まった。
- ・ 子供が習得したサインを家庭で使うようになったことで，保護者の意識に変容が見られ，積極的にサインを使うようになった。
- ・ 家庭でもサインのプリントを掲示してもらったことで，子供が，プリントのサインを指さし，保護者に気持ちを伝えたり，保護者が子供の動作を意味付けしサインで働き掛ける様子が見られるようになった。

○ 家庭などとの連携から

- ・ 子供が習得したサインを連絡帳等で伝えたり，学校であったことを伝えたりしたことで，家庭で子供との間に話題が広がり，特に学校であったことをサインを介して話をするのが多く見られるようになった。
- ・ 家庭で使ったサインや保護者が分からないサインなど家庭からの情報提供があった。
- ・ 現場実習の際，子供が使うサインの情報を実習先に伝えたことで，実習先でも子供の伝えたいことなどを理解しやすくなったり，サインを介して話をしたりする姿が見られた。

まとめとして

- 家庭、学校の両方の視点でアセスメントを考えることは、子供の将来の生活を考えた指導のためには大切である。特に、家庭での子供の実態を把握することは、家庭と学校での実態の違いを知ることにもなる。このことは、子供の将来の生活を考え、家庭と学校が同じ視点で連携して指導に取り組むためには必要なことである。
- 「ことば」を培うためには、子供がサインを使う環境を整えていくことも重要であった。子供がいくらサインを習得しても、かかわり手がそのサインを理解できないと意味を持たなくなる。かかわり手が、子供のサインを理解し、子供に応じたサインを使ってかかわるなど、かかわり手の資質を高めていくことは、子供のコミュニケーション意欲を高めたり、人とのかかわりを広げたりしていくことに有効である。
- 「ことば」を培うためには、コミュニケーション意欲を更に高めていくことが大切である。サインに視点を当てたことは、子供との共通の伝達手段を持つことや伝わる喜び、伝える楽しさを味わうことにつながり、子供からの働き掛けも高まるなど、意欲を高めるためには有効な手段である。また、そのことが、子供自身の持つ力である人やものとのかかわりや認知的機能などの高まり、サインの高次化にもつながり、サインを伝達手段として用いたことは「ことば」を培うために有効である。

VI 今後の課題

- ・ アセスメントの妥当性の検討。
- ・ アセスメントを指導後の評価に用いるための検討。
- ・ 子供の実態に応じて、更にサインを精選していく必要性。
- ・ サインを使う環境を家庭だけでなく、地域、進路先などに広げるための連携の在り方の検討。

引用文献

- やまだようこ (1987) 『ことばの前のことば』 新曜社

参考文献

- 長崎勤, 小野里美帆共著 (1996) 『コミュニケーションの発達と指導プログラム』
日本文化科学社
- やまだようこ (1987) 『ことばの前のことば』 新曜社
- M. Beveridge 他 (1994) 『知的障害者の言語とコミュニケーション (上)』
今野和夫監訳 学苑社
- 田上隆司 (1985) 『トータルコミュニケーション』 日本放送出版協会
- 飯高京子, 若葉陽子, 長崎勤編 (1988) 『ことばの発達の障害とその指導』 学苑社
- 岡本夏木 (1982) 『子どもとことば』 岩波新書
- 池田由紀江 菅野 敦 (1994) 『ダウン症児のことばを育てる』 福村出版
- 小川 仁 (1995) 『子どものコミュニケーション障害』 学苑社
- 白石正久 (1994) 『発達の扉 (上, 下)』 かもがわ出版
- 津田望他 (1990) 『日本版マカトンサイン線画集』 日本マカトン協会